日蓮大聖人御書全集

四条金吾女房御書

しじょうきんごのにょうぼうごしょ

新版1510～1511

四条金吾女房御書

文永8年(’71)5月　50歳　日眼女

懐胎のよし承り候い畢わんぬ。それについては符のこと仰せ候。日蓮、相承の中より撰み出だして候。能く能く信心あるべく候。たとえば、秘薬なりとも、毒を入れぬれば薬の用すくなし。つるぎなれども、わるびれたる人のためには何かせん。なかんずく夫婦共に法華の持者なり。法華経流布あるべきたねをつぐところの玉の子出で生まれん。めでたく覚え候ぞ。色心二法をつぐ人なり。い

かでかおそなわり 候 べき。とくとくこそうまれ 候 わんずれ。この 薬をのませ給わば、疑いなかるべきなり。

闇なれども 灯 入りぬれば明らかなり。濁 水にも月入りぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。浄きこと、蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華とのごとくなり。信心の水すまば、利生の月、必ず応を垂れ、守護し給うべし。とくとくうまれ 候 べし。法華経に云わく「かくのごとき妙法」。また云わく「安楽にして福子を産まん」云々。

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べし。天照太神は、玉をそさのおのみことにさずけて、玉のごとくの子をもうけたり。しかるあいだ、日の神、我が子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名づけたれ。日蓮、うまるべき種をさずけて候えば、いかでか我が子におとるべき。「一つの宝珠の、価直三千なるもの有り」等、「無上の宝聚は、求めざるに自ずから得たり」、釈迦如来「皆これ吾が子なり」等云々。日蓮あにこの義にかわるべきや。幸なり、幸

なり。めでたし、めでたし。またまた申(もう)すべく候(そうろう)。あなかしこ、あなかしこ。

文永八年五月　日(ぶんえいはちねんごがつ　にち)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

四条金吾殿女房御返事(しじょうきんごどののにょうぼうごへんじ)